様式2

平成31年度　学校自己評価表(最終評価)

中長期目標（学校ビジョン）	１８歳で自立できる人間を育てる

中・長期ビジョン	目指す児童生徒像		経営の基本	
		○元気なあいさつができる児童生徒 ○思いやりのある児童生徒 ○夢や希望に向かって努力する児童生徒		1　児童生徒の障がい特性に対応した指導 2　人権尊重と組織的な対応 3　安心で安全な教育環境の整備

評価項目	学部・分掌	評価の具体項目	目標（年度末の目指す姿）	中間評価 評価	中間評価 後期に向けた改善方策	最終評価 達成状況	最終評価 評価	最終評価 来年度に向けての改善方法
主体的な学びを促す取り組み	高等部	○自分で決めた目標（ゴール）に向かって、自ら考え判断しながら最後までやりきる生徒の育成 ○基本的生活習慣、集団規律等が習慣化された生徒の育成	〔生徒〕 ○自分で決めた目標に向かって、持っている力を出しきり、最後まであきらめずに取り組むことができる。 ○「どうしたらできるか」等、自分の目標を達成するための方法を考えたり、自分の言葉で考えを伝えたりすることができる。 ○自分からあいさつ、時間を守る、身だしなみ等の基本的な生活習慣や学習規律、集団規律が日々の生活やあらゆる場面でできる。	B	○教職員は授業の目標（ねらい）を明確にし、生徒の学習意欲が高まるような導入の工夫をする。また、目標へのスモールステップを意図的に仕掛ける。 ○教職員は、授業のねらい、指導や支援方法の共通理解を図る。 ○生徒全員での成功体験につながるよう、けんべい祭等の行事に向けて計画的に学習を積み上げていく。 ○生徒自らが何ができて、次何をがんばるのか自己評価できるよう授業後のふり返りを充実させる。 ○「県米高等部全員で取り組むこと」「高等部学習規律９項目」を教室に掲示する。 ○学習規律、基本的生活習慣が習慣化されるよう、各学級で継続的な指導を徹底する。 ○身だしなみチェック」を毎月実施する。 ○「身だしなみ頑張りポイント」を月に一つ決め、学部全体で取り組む。	○教職員がしっかりとねらいを持って指導にあたり、生徒も具体的な目標を持って学習に取り組むことができた。 ○けんべい祭や現場実習、アートフェスタ等の校外での発表を有効に活用した。ねらいを明確にし、計画的に継続して指導を行ったことで生徒は自分の力を最大限に出し切ることができた。集団としての達成感を持つことができた。 ○目標を達成させるための方策を「自分で考える」ことができるようになりつつある。 ○学習規律は学部全体で整ってきた。習慣化されてきている。 ○「身だしなみ頑張りポイント」を月に一つ決めたり「身だしなみチェック」を実施することで、生徒が身だしなみを意識できるようになった。汗をかいたら着替えたり、手を洗ったらハンカチで拭いたりできる生徒が増	A	○引き続き、具体的な目標を持たせ、目標達成のために何をするのか生徒自身が考えることができる授業づくりを進める。 ○学習規律は引き続き継続的に指導をしていく。 ○「身だしなみチェック」、「身だしなみ頑張りポイント」も引き続き、継続して実施する。
	中学部	○主体的に学ぶ力の向上	○自ら気づき、考え、表現する力が伸び、主体的に活動している。	C	○実態や特性を意識して指導を進めているが、客観性のある実態把握にまだ至っていない。実態把握方法の研修を行い、実態と指導目標、指導内容の適正化をはかる。 ○授業を録画し、場の設定や支援が適切であったかの検討を行う。 ○授業のねらい、目標を生徒と教師が共有できるよう、授業の導入部分で必ず確認する。 ○教師間で、単位時間における学習活動の達成基準を明らかにし、共通理解をはかる。	○研修を通して、客観的実態把握を意識し、適切な目標設定、指導、支援を心がけるようになってきている。しかし、客観的な実態把握のための適切なツールが選定されていない。 ○授業を録画し、授業改善のために必要な手立てを教師間で検討し合った。板書等を工夫し、生徒と活動の目標を共有することができた。授業のあり方や見方が改善されつつある。 ○個々の生徒の障がい実態や達成目標を共通理解し、指導に当たることができつつあるが、その確認のための時間確保ができていない。	B	○実態把握を意識した指導が意識されてきているが、客観的に把握するためのツールが整っていない。適切なツールを選定することが必要。 ○教師間で実態把握や障がい特性の共通理解の時間を週1回持つ。達成目標を見据えた指導ができるように確認し、教師間で連携を取り合って行う。 ○自ら気づき、考える授業の創造をめざして取り組んできた。しかし、生徒自らが「発信する力」、「表現する力」がまだ不十分。障がい特性を意識し、生徒の持つ力を伸ばしていくことができるように手立て等を研修し、生徒が生き生きと学ぶ授業を作っていく。
	小学部	○主体的に学習に取り組む意欲や態度を育むための指導・支援 ○身体・体力づくりと表現力の育成	○児童が学習にすすんで取り組み、自分の思いや考えを伝えたり、最後までやり遂げようとしたりする姿が増えてきている。 ○基礎的な運動能力や体力が向上している。 ○自分の思いを伝えられる場面や方法が広がっている。 ○仲間と一緒に、楽しみながら様々なパフォーマンスで表現することができる。	C	○自分からすすんで学習に取り組む姿や、思いや考えを発表する姿が多く見られるようになってきた。1学期の成果と課題から次にめざす児童一人一人の主体的な学びの姿を職員間で共有し、さらに教師主導から児童主体になるよう指導・支援・評価の方法や単元構成の工夫について授業グループで話し合い改善に取り組む。 ○「身体・体力作り」が学部の共通課題として、楽しみながら身体を動かす活動が設定されている。走れる距離が伸びたり、普段の姿勢や動きに変化が見られたりしてきているが、運動量の確保はまだ十分ではない。引き続き、様々な学習の中に身体を動かす、体力をつける仕組み取り入れたり、食事や運動のバランスついて保護者に発信したりする。 ○自分の思いを伝える姿や増えてきている。思いを伝える相手や、伝える表現の方法を広げていきたい。 ○友達と一緒に表現することで、できることややろうとする姿が増えてきている。誰に何をどのように伝えるのかをまずは教員間で明確にし、伝える内容や態度を見直す。また、楽しみながら表現する場や気持ちを高めるために異学年での活動も工夫したい。	・単元でめざす児童一人一人の主体的な学びの姿がより具体化され、ねらいや支援方法が明確になった。児童の興味関心を生かし、児童が企画、話し合いや選択で内容を決めたり、児童自身が考えて行動する場面を増やしたりするなど単元構成が工夫され、児童が主体的に活動し，最後までやり遂げようとする姿が増えた。達成感や成就感も感じられ、教師主導から児童主体の学習へと変化してきている。 ・学校生活の中では，様々な場面で身体を動かすことや姿勢の保持に意識して取り組み、児童も少しずつできることや体力がついてきている。長期休業中の運動量確保や食事バランスなど家庭との連携も欠かせない課題である。 ・普段の学習、行事など様々な場面で発表する場面が設定され，新しいことに挑戦したり、積み重ねることで自信を持って楽しみながら表現したりする姿が増えた。また、異学年との活動も設定されたことで，伝えようとする意欲が高められ伝える場面や相手にも広がりがみられた。ただ、相手を意識することにはまだ課題がある。	A	○本年度同様、学年会や個を語る会を適宜設定し、児童個々のつけたい力やねらいを明確にし，職員間で共通理解して指導にあたる。 ○授業作り研修で「主体的な学び」に向けて本年度効果的であった指導、支援、評価の方法と課題について確認し，「授業作りのポイント」としてまとめ、学部会や学部授業作り研修を通して次年度に引き継ぐ。 ○体力作り、身辺自立など家庭や関連機関との連携が必要な課題については、将来を見据えてその重要性について通信等で発信するとともに，懇談（個人・学年・学部）等で繰り返し説明し，連携が図れるようにする。 ○日々の学習の中に様々な方法での「発表」の場面を設定し、表現することを積み重ねる。挨拶、報告、振り返りなど些細な場面から伝える相手が意識できるように指導する。
学部間の連続性・系統性	教務課	○「カフェや神楽を意識した」年間指導計画の作成	○年間指導計画に「カフェや神楽を意識した」学習のねらいや活動を設け、学部間の連続性、系統性のある年間指導計画を作成する。	C	○「カフェや神楽を意識した」とは具体的にどういうことなのかを、県米で育てたい力「5つの力」との関連から検討をした。今後それを全職員に提案した上で、年間指導計画の見直しに生かす。	○　学校経営方針の指導の重点にあげられている「カフェや神楽を意識した」という捉え方を県米で育てたい力「５つの力」の中の主な領域と関連付け、それを全職員で共通理解をした。そして、学部間の連続性、系統性のある年間指導計画を立案するように確認をし、各教科等でこの領域を意識しながら年度末の完成に向けて取り組んでいる。	B	○各教科等から出された来年度年間指導計画が「カフェや神楽を意識した」ものになっているかを点検、確認する。
表現力向上	表現活動推進	○授業力向上のために音楽、表現活動の授業を見合う会の設定 ○けんべい祭での発表が子どもの成功体験となるよう学校行事部との連携推進	○今年度は、音楽、生単、表現活動を推進し、音楽と表現活動の授業を見合う会を設定する。 ○「合わせる」というテーマを大切にし、けんべい祭の発表で児童・生徒が成功体験することができるように、各学部の取り組みについて情報交換したり学校行事部と連携したりする。	B	○学校教育目標に「神楽を意識した」とあるが、神楽の何を意識するのか全学部が分かって取り組んでいるまでには至らない。何のために表現活動をしているのか、「合わせる」ことの意味や目的は何かを各学部が分かって取り組んでいけるように研修会を持つ。 ○後期の各学部の取り組みについて、情報交換する。	○授業を見合う会は、１学期に行うことができた。 ○表現活動がめざすところの研修会を冬休みに持つことができた。８０％以上の教員が研修を受け、人と合わせることがなぜ大切なのか、発達の視点から学ぶことができた。	B	○表現活動推進部がめざしていることを全体へ発信するために、全体研修を設定する。
体力向上	体力づくり推進	○「体力作り推進計画」と「５つの力」を結びつけ、体力づくりの在り方の明確化 ○各学部の取り組みによる運動能力の向上	○「体力作り推進計画」と「５つの力」の位置づけにより、教育課程の中での体力づくりの在り方を明確にしていく。	C	○体力測定の記録について形式の統一を図り、実施種目の共通理解を図った。 ○体力づくり推進計画も３年目となり、より実態に合ったものに変えていくようにし、「５つの力」結びつく活動となるよう検討を図る。	○体力測定について、小中高と統一した形式を作成した。 ○体力づくり推進計画の検討を図り、「５つの力」と結びつくような形に変更した。	C	○体力づくりの場が学部で、重なることが多い。重なっていてもできる活動や、できる限り、各学部の希望する活動ができるよう調整を図る。
経営の基本（指導力・人権尊重・教育環境・教育組織・情報発信）	研修部	○教職員が教育活動を行う上で必要な研修の充実 ○各学部の重点項目についての授業づくりの実践	○教職員が教育活動を行う上で必要な研修を計画し、実施している。 ○各学部の重点項目について研修を積み、自己やグループの授業づくりに活かしている。	B	○児童生徒の人権意識を高めるための支援のあり方について外部講師による研修会を実施した。 ○年度始めに計画していた教職員研修を概ね実施した。今後に向けて、教職員に必要な研修かどうか等、アンケートをもとに、内容や時期等見直し、検討していく。 ○各学部で、重点項目を共通理解し、授業づくりに取り組んだ。今後とも、各学部内で、更に研修を積み上げていく。	○年間を通して、計画していた「全体研修」「新任者研修」「ミニ研修」「希望者研修」をほぼ実施することができた。研修内容を各分掌で検討・精選していただいたことで、充実した研修となった。 ○授業づくり研修では、学部研修や授業実践を行ったりしながら、重点項目の達成に向けて研修を積んだ。各学部とも、研修した内容を自己やグループの授業づくりに活かすことができた。	B	○研修のアンケート結果をもとに、来年度、教職員に必要な研修を検討し、大まかな研修内容や実施時期の計画を立てる。 ○各学部の授業づくりのテーマとアドバイザー派遣事業での校内研修のテーマが一致しにくくなった。今後の校内研修は、授業づくりに限らず教職員に必要な研修を行うことも視野に入れて外部講師を考えていきたい。 ○授業づくり研修では、各学部で、今年度の取り組みを来年度に繋げていけるように引き継ぐ。
	人権教育部	○児童・生徒の人権意識の向上 ○相談しやすい組織体制の確立と迅速な対応	○児童・生徒の人権意識による行動が、年度当初より増加している。 ○問題行動等が発生した時、組織的な対応を迅速かつ適切に行っている。	C	○いじめに対する教職員の意識を高めるために、「いじめ防止基本方針」について周知する機会を随時設けた。 ○生徒が自分自身を見つめ直すきっかけとしたり、教員が生徒の人権意識について実態把握したりするための人権アンケートを中学部及び高等部の単一学級で実施した。次回は１２月と２月に実施し、傾向を分析して次年度に向けた対策を検討する。 ○チェックリストを用いた教職員対象の自己評価を６月に実施した。次回は１２月に実施する。また人権に関する認識が深まるよう、チェックリストの内容について月始めに校内サイト等で知らせる。	○教職員が一層アンテナを高くして児童生徒を支援できるよう、自己チェックリストに児童生徒の人権意識に関する項目を設けた。また、生徒が自分自身を見つめ直すきっかけとなるよう、人権アンケートを年3回実施した。年度当初に比べて、児童生徒の人権意識の向上による行動が増加しつつある。 ○問題行動等が発生した時、生徒指導課長が中心となって迅速に生徒指導委員会を実施し、情報共有および今後の指導についての話し合いを行って適切な対応をすることができた。	B	○児童生徒および教職員の人権意識の向上に活かせる研修を実施する。 ○教職員対象のチェックリストおよび生徒対象の人権アンケートの見直しを行う。 ○問題行動等の予防、早期発見、迅速な対応に向けて、児童生徒の実態について情報収集に努める。
	安全指導部	○緊急時対応に関する基本的事項の理解	○児童生徒の様子や環境に注意して見守り変化に気づくなど、事故を未然に防ぐための意識を高く持って対応することができる。	B	○年度当初のオリエンテーションに加え、各学部での発作対応研修や救急救命研修等を実施し、研修内容の理解・活用への働きかけを行うことができた。 ○熱中症警報・特別警報等について、保健室前ホワイトボードでの情報発信は適宜行ったが、全体への周知の仕方においては課題があるため、役割分担を明確にしながら連携を図っていく。 ○毎月の安全点検やヒヤリハットの共有などで、危機管理意識の持続を図ってきた。今後も引き続き職朝や終礼、けんべいサイト等で情報発信をしながら周知を図っていく。	○感染症への対応について見直し、注意報や警報の発令時、第2種学校感染症の発生時の対応手順や役割分担を明確にして連携しながら対応した。 ○インフルエンザやノロウィルス等感染症の流行時期に、感染に先立って注意喚起や予防・対応の方法について周知に努めた。 ○学習環境の整備に留意し、安全点検日だけでなく不具合や異常に気づく度に対応し、安全点検表に記録として記入することもあった。	B	○年度当初は、職員の入れ替わりのために児童生徒の障がい特性を踏まえた学校安全に関する知識の差が大きい。そのため、学校安全に関する基本的事項について内容を精選して研修を行う。 ○年度当初に実施した研修内容を理解し、日々の指導において危機管理意識を維持したり、研修したことを活用したりするための働きかけを年間を通して行う。 ○熱中症警報や特別警報等の発令時において、児童生徒の健康保持のための適切な対応がとれるよう、役割分担を明確にするとともに連携が図れるような全体への周知の仕方について見直しを行う。
	教務部	○自立活動に特化した個別の指導計画の検討	○本校の自立活動の個別の指導計画のあり方について方向性を出す。	C	○自立活動個別の指導計画検討会を立ち上げ、検討を続けてきた。そして、検討会での方向性がまとまったので、今後、運営の会や職員会で提案していく。 ○自立活動だけではなく、学習指導要領が新しくなった関係で関連する諸計画も総合的に検討を進めてきている。	○自立活動個別の指導計画検討会で「個別の課題選定シート」様式を作成し、既存の個別の指導計画と併せて自立活動の個別の指導計画とする方向性をまとめた。そして、「個別の課題選定シート」を次年度の引き継ぎ資料として年度末に記入する予定である。	B	○「個別の課題選定シート」の記入の仕方についての研修を３学期中旬には各学部で実施する予定である。
	進路指導部	○本校の進路指導の考え方や基本的な福祉サービスについて理解し、保護者説明の実施 ○保護者のニーズを具体的に把握し、個に合った進路情報の提供	○教職員が本校の進路指導の考え方や基本的な福祉サービスについて理解し、説明することができる。 ○保護者のニーズを具体的に把握し、個に合った進路情報の提供が行われている。	C	○終礼等で、福祉サービス利用の方法についてミニ研修を行い、教職員が保護者に説明できるようにする。 ○分掌会等で学部担当から各学部の保護者のニーズを把握し、学部担当から各学部へ必要な情報を提供できるようにする。必要に応じて懇談等に進路担当が同席し、情報提供を行う。	○教職員が保護者に説明できるよう、終礼でも卒後に向けた福祉サービスの利用等についてミニ研修を行ったが、研修後の各学部の状況を確認する必要がある。 ○分掌会では各学部担当から保護者のニーズの確認を行った。学部担当には卒後に向けた情報提供を行っている。高等部では進路担当が懇談に同席し、情報提供を行い、今後の方向性について話し合った。	B	○進路指導や進路に関わる福祉サービス利用について、教職員の実態や知りたい内容を把握するための方法を検討・実施する。 ○各学部の保護者・各学部のニーズに応じた情報提供や研修ができるよう、ニーズを把握するための方法と内容を検討する。
	学校行事部	○「体力づくり推進計画」、「表現力推進計画」が行事のねらいや取り組みへの反映	○ねらいや取り組みの視点を明確にすることで、児童生徒が学習の積み上げを生き生きと発表することができる。	C	○今年度のスポーツチャレンジ、けんべい祭の反省アンケートを参考にして、ねらいや取り組みの視点が明確だったか、成果と課題を明らかにする。 ○上記の成果と課題を踏まえて、体力づくり推進、表現力向上と連携しながら、来年度のスポーツチャレンジ、けんべい祭のねらいや取り組みの視点を明確にする。	○スポーツチャレンジは「体力づくり推進計画」をもとにねらいを『日頃の体力づくりの成果を表現する』こととし、けんべい祭は「表現力推進計画」をもとにねらいを、『仲間と一緒に合わせることを意識して活動に取り組み、表現することの楽しさを味わう』こととした。それぞれの行事のねらいと取り組みの視点を明確にした上で、全教職員でそれを共有して行事に取り組んだことで、ねらいを達成することができた。	B	○今年度のスポーツチャレンジ、けんべい祭の反省アンケートをもとに、ねらいや取り組みについて明らかになった成果と課題を来年度に引き継ぐ。 ○引き続き体力づくり推進、表現力向上と連携しながら、ねらいや取り組みの視点を明確にして行事の企画、運営をすることで、児童生徒の学習の積み上げを生き生きと発表することができるようにしていく。
	センター支援部	○校内外への就学に係る情報発信	○学校公開や進路選択のための見学会の参加者に、目的に応じた必要な情報が発信されている。 ○就学を検討するにあたり、継続的な連携や相談が行われている。	C	○各種説明会参加者のアンケートより、来年度の会の持ち方や資料についての検討を行う。 ○西部地区の特別支援ワークショップや本校開催の担任説明会において、本校就学に向けた手続きについての情報発信を行う。	○学校公開、進路選択のための見学会参加者アンケートで、概ね目的に応じた情報が得られたという集計結果であった。 ○本校就学に係る説明会を開催し、西部地区の小中学校の特別支援学級担任に就学の流れや体験入学の手続き等についての情報発信と啓発を行った。校内についてはミニ研修で発信した。 ○就学相談については、個別に聞き取りや説明を丁寧に行い、共通理解を図った。	B	○就学の流れや体験入学の手続きがよりわかりやすく発信できるよう、各種説明会資料の見直しを行う。 ○特別支援学級担任の説明会や、校内研修を引き続き行うことで、就学検討の流れや体験入学の手続き等についての情報発信を行う。
業務改善		○業務改善へ向けた分掌再編について効果の検証	○担当職員の間で、ワークシェアが行われ業務量が平均化されている。 ○業務から離れ、リフレッシュすることができている。	D	○時間外業務については減少傾向が見られるが、職員によって大きな違いが見られる。実態を把握し、声かけ等を継続する。 ○分掌によって日常的な業務量の違いがあり調整を行う必要がある。（分掌担当業務の見直し）	○週１日のライトダウンが習慣化したことで、時間外業務の縮減につながってきた。 ○職員評価で、ワークシェアについて肯定的な意見が５０％に届いていない。このことから、業務量の偏りがあった。	C	○分掌内の業務内容の見直しを行う。分掌毎に、意見の吸い上げを行うことで具体的に削減できる業務を明確にしていく。 ○分掌内での業務分担の見直しを行う。（所属職員の中で、業務の流れの確認を行う。）

評価基準　A:十分達成(100%～81%)　B:概ね達成(80%～61%程度)　C:変化の兆し(60%～41%程度)　D:まだ不十分(40%～31%程度)　E:方策の見直し(30%以下)